
月 刊

MéLange

Vol.120



2017.02.26

特集 / 第5回 日本・韓国・在日コリアン詩人共同
ユン・ドンジュ生誕 100 年

月刊「MéLange」

Vol.120 2017.02.26

「月刊めらんじゅ」編集部

詩 & 俳句

- 書に関する幻想 ……………野口裕 03
- 如月詠 (俳句) ……………岩脇リーベル豊美 04
- 水曜の終電—雑十句 (俳句) ……………高橋雅城 05
- 新器的美的電話……………月村 香 10
- ピラミッドの風……………北岡武司 11
- 冬のひそみ ……………大橋愛由等 12
- 水星のアイスクャンディー／火星の故障 ……………中嶋康雄 13
- ほうでん ……………高谷和幸 14
- 一日の理由 (ルバイヤート風) 19-24 ……………大西隆志 15

第5回日本・韓国・在日コリアン詩人共同ユン・ドンジュ生誕100年記念詩祭

- 開催内容 …………… 06
- 朗読詩①／「太初の朝」の詩人に ……………北原千代 07
- 朗読詩②／「風と星と詩と」祖国—青年詩人・ユン ドンジュを思い遣って ……………金里博 08

連載エッセイ

- 神戸詞あしび 109 「墓正月」を実見しシマの祭祀を想う ……………大橋愛由等 16

編集部だより★39／数年前から大学生アルバイトの面接で聞かなくなった質問があります。「あなたはどんな本を読んでいますか」。もちろんすべての大学生が本を読まないということではありません。やはりいつの時代でも、きちんと読書を積み重ねている学生はいて、みずからの知の集積をかさねていっています。学生が本を読まなくなった主因はネットの普及、つまりスマートフォン（携帯電話）の画面からの情報蒐集がもつぱらとなり、本を一冊まるごと読むという「一冊読みの労力」に価値を見出さなくなったからでしょう。たしかに読書は時間と労力が要求されます。知りたい情報、知識があれば画面が大きくなったスマートフォンやタブレットでさぐれば検索できるので。書籍という重量もうとましく思っているのかもしれませんが。今月の読書会チューターは、コトバの今を生きるジャーナリスト（元読売新聞編集次長）で、大学で教鞭をとっている渡口行雄氏です。（大橋記）

◆書に関する幻想

野口裕

あの人の書ですか
 そうでんな 升目のない書ですかなあ
 普通、字書くとき
 大なり小なり
 無意識に見えない升目を頼りにするもんですけど
 それが見えまへん 独創的ですか
 ほお そうなんですか

とある書道展で
 知人は丁寧な答えてくれた
 話が終わった途端に
 見えない升目があちこちにあるような
 気になり
 この空間が升目でぎつちりと
 ぎちぎち仕切られているような
 凡人は升目の隙間でしか身動きできないような
 そんな目で見たとき
 書道展の一角に
 透明の升が
 うずたかく積み上げられていた

◆如月詠

岩脇リーベル豊美

朝雪やモスレム頭巾の寝顔映え
 河凍る女神も向こうに渡れるように
 黒歌鳥うしろ姿の曙光切り抜く
 耳を焼く言葉突き刺さし凍る月
 オリオンに転がる如月冴えわたり
 浅墓に過日のホロスコープ読み返し
 雪まみれスフィンクス待る穴抜ける
 雪搔きの我利我利で醒める鬩魚の墓
 まんじりもなく真夜平穩の活字なく

冬霧やすべての窓に蘭飾る
 雪鶴や国境近くのカフェで待つ
 咳て咳て咽喉飴くれし仮想敵
 冬の旅冷却塔に陽が沈む
 冬の暮れ高校の美術室みたいな匂い
 天使の梯子舞踏靴の踵ついに折れ
 プリズムに遊ばれて鳴る木琴の午後
 春待ちのちびた鉛筆そっけない腕時計
 地這う小鳥いち番に見つける待雪草
 無人駅庇の下で雨垂れを見る
 春かなと声出してもみな音楽しか聞こえない

◆水曜の終電

高橋雅城

◆雑十句

玄関のディープ・パープル寒余す
 旧正やそらみたことか新聞紙
 桜餅喰らひ目をむく子規の弟子
 言いたいのもそれだけあんだ水仙花
 水曜の終電余寒運びをり
 凧たいくつだけが知っている
 向脛こむらがえりで春炬燵
 名残雪ふらず明日も引きこもり
 建國の記念日けさに薪割りぬ
 及第のモーリス・メルロポントイかな

第5回日本・韓国・在日コリアン詩人共同
 ユン・ドンジュ生誕100年記念集会 (2月13日〈月〉)



いつになく寒い冬である。「冬の詩祭」ともいべき〈日本・韓国・在日コリアン詩人共同ユン・ドンジュ生誕100周年記念集会〉(大橋愛由等、金里博共同主催)が2月13日(月)に開催された。会場は、京都・同志社大学今出川キャンパスの「尹東柱詩碑」前。今年は尹東柱の生誕100年にあたる記念すべきメモリアルな年にあたるために、詩碑にたむけられた花束は例年にくらべて多かった。われわれは、尹東柱の詩を読み、そして自作詩(俳句)を朗読し、語った。現今の日韓における政治問題(少女像に関する事案)に、われわれの会も、残念ながら影響を受け、当初予定されていた韓国からの二人の詩人参加が見送られた。しかしこうした困難な状況であるからこそ、民族、国境を超えて、ひとりの詩人にむけた連帯の表現の言葉をつむいでいくことに意義があるのだと思っている。



第5回日本・韓国・在日コリアン詩人共同ユン・ドンジュ生誕百年記念集会 朗読作品

** 「太初の朝」の詩人に

北原千代

三十回にも満たない
 四季の巡りのなかで
 あなたはいつたい
 いつ気づいたのですか

みずみずしく赤いダリヤの花芯が
 生まれながら腐敗していること
 野原を覆ういちめんの雪の底が
 青く燃えていること

そして月や星や風の道
 人には悟ることのできない神秘のありさま

すべては太初から整えられて在ったことを

あなたは人のつくりごとや
 はかりごとに与しなかった
 偽りのたいまつを掲げて行進しなかった

隊列に踏みしだかれる道端の
 みすぼらしいスマレのために夜明けまで
 天を仰ぎ
 あなたは泣いたでしょう
 あなたは泣いたでしょう

凍てつく冬の朝
 あなたの火の呻きは
 ましろい雪の翳をこんなにも青くめざめさせ
 一篇の詩が
 雪原の底から起き上がる

❖ “바람과 별과 시와” 민나라

민나라: 조국 본국 고국

—무르익은 시인 윤씨 동주를 돌구어 본다

한밤 김리박

아아
푸름이 글노랫꾼 윤씨 동주여

그대는
예수의 가르침을 가슴에 품어
겨레 사랑, 나라 사랑을 안고
그리운 남나라 믿고장을 떠나
사나운 검은 바다 여울을 건너
못된 짜개 나라 옛서울의 도시샤 큰 배곳에서
꿈 많은 푸름이 때를
맑고 조용히 배우는이로
뜨겁게 배우고 살았는데
어른 글노랫꾼으로 무르익기 앞서
돌 없는 아까운 목숨과 높은 얼뜻을
끔찍하게 앗기고 말았었다.

믿고장을 떠날 때
그대가 손수 베끼고 남긴
글노래 묶음 “하늘과 바람과 별과 시”의
머리노래는
오늘날
우리 나라의 온 배곳과
많은 발나라 배곳에서 배우는이들이
알고 익히고 외우고 있나니
오오
푸름이 글노랫꾼 윤씨 동주여
그대는
우리 한겨레의 자랑이자 삶의 본보기여라.

그대가
그렇게 끔찍하게 목숨을 앗기지 않았더라면
다섯 해 뒤, 열 해 뒤에는 더 많은
좋고 훌륭한 글노래들을 지어냈을 것이거늘...

오오
푸름이 글노랫꾼 윤씨 동주여
새삼
그대의 죽살이를 남긴 글노래서 되생각해 본다

글노래의 드와 드 사이
글덩과 글덩 사이를 파 헤쳐
무르익을 글노랫꾼인 그대와
그대의 그윽한 뜻과 만을 생각해 보면 흰히 돌아난다.

믿고장 미르우물에 발붙여 살면서도
겨레의 바람과 새 나라를,
피와 눈물로 되찾은 하나인 울 민나라를
“한점 부끄럼이 없이”
맑고 밝고 아름답고 상냥한 마음으로
한 어버이처럼 높이 모시고
갓난이 안아 주듯 지켜면서
나라 되찾은 첫날
그대는
삼가 한밤메를 찾아 오르고 내리며 한 쪽 짓고
하늘 못에서
물을 한 모금 두 손으로 떠마시고 한 쪽 짓고
철 따라
진달래 나라
참아욱꽃 나라
꼬까 나라
하이얀 눈 나라인

아름다운 땅의 곳곳을 찾아 다니면서 한 쪽 짓고
갈 서울
안 서울
마 서울
새 서울을 찾으며 한 쪽 짓고
품앗이 나라를 자랑삼아 짓고
굶어 죽을 걱정
얼어 죽을 걱정
집걱정을 안해도 좋은 나라 누리를 기리며
어린이 무력무력 자라고
늙으신 분들 곱게 늙으시고
어른들 나라 살림을 튼튼히 꾸리려고
갓은 슬기와 땀을 흘리면서 일하는 모습들을
날날이 노래할 것인데
아아
너무나도 이르게 앗긴 목숨이어
맑고 드레진 속뜻이어
끝없이 높고 넓은 슬기여
뜨겁디 뜨거운 몸뚱이여...

❖ 「風と星と詩と」 祖国

—青年詩人・ユン ドンジュを思い遣って
*ハンバク キム 리바ク
*訳：秋山一郎

ああ
青年詩人—ユン ドンジュよ

あなたは
イエスの教えを胸に秘め
民への愛、国への愛を抱き
忘れ得ない故郷を発ち
波荒い玄海灘を越え
大日本帝国の古都に位置する同志社大学で
夢多い青春時代を
澄んだ心で静かに学ぶ学生として
神学を深く探究しながら過ごしていたが
末永く非凡な成人詩人として名を高める前に
かけがえの無い生命と秀抜な詩魂を
無惨にも奪われたしまった。

故郷を後にするその日
あなたが手ずから写本し残した
生前唯一の詩集「空と風と星座と詩」の
序詞は
今日
我が国の多くの学校と
諸外国の学校で学ぶ児童生徒たちが
学び深め語んでいる
ああ
青年詩人、あなたユン ドンジュよ
あなたは我が韓民族の誇りであり人生の模範。

あなたが
あのように凄惨に生命を奪われなければ
五年後、十年後には何倍も多くの
勝れた立派な詩を世に送ったものを...

ああ
青年詩人—ユン ドンジュよ
心を鎮め丁寧
あなたの全人生を綴り残した詩を読み直してみる

詩の行間
連と連との間を何度も何度も読み返してみると
成熟し成長した詩人のあなたと
あなたの深く熱い志と天性の才能が浮き上がってくる

他国の中の故郷、中国龍井^{ヨンジョン}に根を張り生きても
朝鮮民族の宿願だった祖国の独立を、
血と涙で奪い返した一つの祖国を
「一点の汚点をも残す事なく」
澄明で美しく思い遣りある心で
祖父母を敬い深く祭り
嬰兒を抱くように護りながら
独立祖国を取り戻した最初のその日
あなたは
赤心で白頭山を登り降りながら一篇
白頭山天池の
水を両手で掬い飲み更に一篇
四季を追い
躑躅の国
無窮花の国
紅葉の国
白雪の国の
各地を巡礼しながら更に一篇
古^{いにしへ}の都
西の京ピョンヤン
中の京ケソン
南の京ソウル
東の京キョンジュ
民主の祖国を誇り一篇
餓死の恐怖
凍死の恐怖
流浪生活皆無の祖国を讃え
子どもたちがすくすく育ち
老人が美しく老い
壮年が平和で豊かな国に発展させるために
あらゆる知識と技術を駆使し額に汗しながら働く姿
全てを詩情豊かに詠ったろうが
ああ
余りにも速く奪われた命よ！
水晶のように澄み重厚な詩想よ！
大空のように無限に高く広い知性よ！
民族愛の熱い熱情よ！

◆新器的美的電話

月村香

それね
5900円したの
ことばは そこで
終わるの
それブティックってとこ
あんたがATMを操作しているから
こっちは電話口で
ひまで
くさび型文字を
なぞってる
好き
きらい

をお互いが
通話しながら
それぞれの作業のうちで
やばい
へッ！
って
しながら
やっちゃえって
バラのバックから
カルネを取り出す
9000円で 買える
ポーチに
ペンを山ほど入れて
それ好きだから
10本かうんでしょ
またって

次の通院日を
ポケットのカランドリエで確認する

そのひとを見てた
けどそこへは
アフィッシュを見にゆくためだけ
わたしの瞳が遠くなることはない
ことだけはわかったし
バスには片道200円の賃料がいつて
まだ9000円のポーチにこだわってた
次のTELのとき
もう一度相談にのってよ
あること以外は
ひまでしようがないの
あは！

*注:カルネ=手帳
カランドリエ=カレンダー
アフィッシュ=ポスター

◆ピラミッドの風

北岡武司

風が吹きあげてくる。女の髪をまきあげ脚をなぶりコートに悪戯し 階段に漂うビニール袋をおどらせ オペラ通りにでる四つの出入り口に音を立て吹きあげ その一角でこの顔にあたる。風は地下の闇からくる。うつむいた顔をつきさし髪をなぶりねぶりをいぶりうすい衣類をなで、すどおりする。私がないかのように知らん顔でとおりすぎてゆく。メトロにおりる人や通りにする人も風とおなじでつめたたくわたしを無視する。手袋も上衣もズボンも靴下もほんの気休めだ。地の底の闇のつめたさが石をとおり空気をとおり衣類をとおり肌をとおり もうほとんどない皮下脂肪をとおりとおって体の芯にさしこむ。これでもかこれでもかとおつめたさが……。知っている、悲しいとかたつたひとりと呟くも嘆くも愚かだ。独裁政権を率いたチャウシェクがあえなく処刑され 秘密警察セクリタリアにいた私ひとり生きながらえた。国軍は家族全員の体に銃弾を何発も貫通させ 私は国境を越え国境を越え汽車をのりつぎのりつぎにげた。緯度も太陽のかたむきぐあいも光のさす角度もほぼおなじだが車両の隙間からの 景色は西に行くにつれ変わる。悲しいとかたつたひとりとと思うだにむなし。最初からたつたひとりで悲しかった。悲しかったのだ。革命こそが人民の生きる道 皆平等と言いながら皿に装われた食べ物の量のみくらべ 己の分を思い知り憎しみを育みあつた。憎悪と疎外はすみずみに浸透した。憎悪こそが階級闘争と歴史の推進力だと皆固く信じていた。何度も口にすればどんなことでもほんとうに思えてくる。それがあるのまゝのほんとうになる。憎悪 あまりにも人間的 猿よりも動物的……人と人とのあいだに警戒心と猜疑が張りめぐらされ 理性は保身のためにだけ用いられ 神経はぼろぼろになり 守ろうとする身は神経からなる骸骨と化し よろよるとアンテナを広げ発信し受信し骸骨は腐食した。庭で銃殺された父母も妻も娘も申わず顧みずふりかえらず肩章と勲章で飾りたてたカーキ色の制服をぬぎすて あり

あわせの服を身につけ駅舎にはしり貨物列車のつめたい車両にもぐりこんで何十年がすぎたろう。時間などありはしない。時間はない。がこの身は確実に老いていく。あれだけ虐殺に加担したのだ。天使にはなれまい。ならばせめて犬になろう。憎悪を命の糧とする神経の骸骨であることをやめ メトロの出入り口に這いつくばりわずかなコインを恵まれこゝにいればよい いればよい。故郷はとおく私を知る人はこの世にいない。ただのひとりもわたしを知る人はない。ピラミッド駅の風のつめたさをひしと感じ受けとめ スフィンクスならぬ犬の格好で這いつくばり わたしはこゝにいる。こゝにいる—Me voici (ム・ヴォアシー俺はこゝだ) それにしても誰に向かつて「わたしはこゝにいる」と心で叫ぶのか。男盛りがラム革コートに身を包み赤いアスコットタイを襟元に押しこんで金髪なびかせ一段一段駆けるように階段をあがってくる。両手をコートのポケットにつつこんで誇らしげに……。脇を通るときズボンの裾からはみでたマロンの靴が輝ひかる。右の拳をポケットからだすと目の石段でカロリンカラリンと一〇サンチームの落ちる音。首をひねっても背中のみえない。颯爽とあるいているのだろう。青空が四角にくざられ通りを挟んでむきあつた建物。屋根は風雨にくすみくすんだ屋根に鳩が二羽休んでいる。鳩もそこにいる。鳩にもあの男にも幸いあれ。ピラミッドの風で髪の毛が頬にあたる。

„Ein wenig besser würd' er leben.“

Hildest du ihm nicht den Schein des Himmelslichts gegeben :

Er nennt's Vernunft und braucht's allein.

Nur tierischer als jede Tier zu sein.“

「あなたも天の光の輝きを人間に与えなければ

もうちつとまじに生きるでしょうに。」

人間はそれを理性と呼んでどんな動物よりも

もつと動物的でいるためにだけ

もつぱらそれを用いております。」

ゲーテ『ファウスト』「天上のプロローグ」より。メフィストの「天上の主」に向けた台詞。Goethe, Hamburger Ausgabe in 14 Bdn. Bd.3 S.17

◆冬のひそみ

大橋愛由等

光が
逃げた
冬の
まちの
蔭の
なかの
ことばは
はにかみながら
語りだし
一本の
北から南
南から北への
つらなりの
父を乗せ
詩人を乗せ
青年たちの
みていた
冬景色の
さなかの
風と星は
ただそれがあるだけの
ひとびとの

息と声と溜息が

その日も 昨日も
そして明日も
その地にある
その地に根づき
ものたちが
よりそい
なやみ
ほくそ笑み
哭き
大地の息吹の
もうすぐ
春が
とだれかが
宣告するのを
待って
いや
待つだけ
なのかもしれない
来ないかもしれない
と
誰かが また
つぶやくのを
冬の蔭で
ひそみながら
若者と詩人は
いつかどこかの
記憶で

見知った

雲のかたちを
ああそうだった
あれもこれも
夢だと
思いたくない
反芻だけの
日々を
疎いながら
その一日を
生きていた
ことは
確かなのだと
踏みしめた
街路に
残されている
のかもしれない
樹木が樹皮に
書き込んで
いるのかもしれない
それもこれも
この街の
この場所の
冬の
ひとつの
光のありか

◆水星のアイス

キャンディー

中嶋 康雄

だますものは弱く
だまされるものはもつと弱い
アイスキャンディーは語られるだけで
語るものも燃えつきている
ときどき横切るものが多い出す
地面のでこぼこ
でこぼこの隅の隅つこで
アイスキャンディーの残痕が笑う
アイスキャンディーを持つ手は
燃えないビニールでできている
消え失せようがない
いつまでも漂う
こんな生活がいやになったからといって
どこにも行けはしない
監視と耳鳴りはつきまとう
幼い頃小遣いで買って食べた
二本の柄付きアイスキャンディー
今でも青いしずくがべたべた手首を伝う
ちっぼけな欲望が
さらにちっぼけな計算をしている
財布に穴があいているから
せつかくの計算も落ちてゆく
もう黙っていればよいのだと
アイスキャンディーをねぶりながら呟く
裸の柄から
水星の暗黒がこぼれ落ちる
ときどき横切るものが話しかける

◆火星の故障

中嶋 康雄

故障した自転車
火星に行った
火星は大昔から故障していた
自転車のタイヤは
火星人に盗まれた
火星人は昔ながらのクラゲの姿で
盗んだタイヤを食べてしまった
火星人は故障して
黒い煙を
ぽーっと吐いて
止まってしまった
つまらないから帰りたくなった
火星の砂を記念に持ち帰ろうと
しゃがんで砂を集めていると
ちがう火星人がやってきた
「砂を返せ」
と身振り手振りで言った
手足がやはり多く
ややこしかった
腹が減ったので
火星人を捕まえて
茹でて食べた
手足はかたかったが美味かった
もつと茹でると

少し柔らかくなったが不味かった
きつと故障したのだろう
砂の底に水があり
魚が泳いでいた
まぬけな面をしていた
簡単に手掴みできた
臭いので食べる気にならなかった
醜いので踏み潰した
空を見上げると
火星人が体を膨らませて
飛んでいた
手足がやはり多かった
網で簡単に捕まえることができた
悲しそうな目でみつめ
脳に直接語りかけてきた
「自転車を修理してやるから
さっさと帰れ」
生意気なので
だまして眠らせて
ブチブチちぎって
茹でて食べた
かたかったが美味かった
もつと茹でると
少し柔らかくなったが不味かった
食べ過ぎて
腹が故障したので
腸をズルズル引き出して
修理した
修理が下手くそで
すぐに脱腸した
ブラブラさせながら
出発した
自転車で火星を一周した
どこにも帰れなかった

◆ ほうでん

高谷和幸

列車の窓から
 岩石のまわりのフロアがさわいでいる
 輪になった姉 (sister) たちのむこう
 むこうである「それ」のさきの「それ」の
 「もう見ないという意識から」
 沈黙 (もだし) の神殿のすんぼうがかすれていく
 肉の「だまり」
 「それ」唇のはいあがり
 「それ」にのうでのぶらさがり
 甥 (doctrine) たち
 が腑分けされ
 通過していく
 「見てしまった」ところ
 岩石を生んだ女からはじまる
 その人はアルキメデスのらせん (かとりせんこうのような) の
 記号が彫られていて
 「(それ) の意味」を姉たちは変える
 年に一度、階段の頂上から
 極彩色に着飾った男が突き落とされる
 それは過去であり、現在であり
 未来である岩石の
 「石の放屁」
 伝わる音が
 反射している
 「ほうでん ほうでん」

◆ 一日の理由 (ルバイヤート風)

大西隆志

19 よい、香りがする骨は秀れた詩の人だとされた過去
 より、黄昏に焼かれていくのは悪臭ただよう詩集の文庫
 よみ、雑木林から拾ってきた枝々を脚に括り付けては
 失語
 よび、こちらからあちらへの贈り物はマルシカクの判子

20 光が届かない所には、寄せ集めのサーカス団の幟が逆さ
 いつもの失敗は予定されているのか、正午の時間の差
 抗いがたい世界に吹きさらされていくのは嘘つぼち
 な蜘蛛の巣がまつわる草
 簡単に判断された意思が投げられて誰かの頭を傷付
 けるさ

21 アロマが漂っているからカーテンは光を受け止め
 ドアの外に流れ出すのは一日の始まり、真実なんてか
 つての夢
 面倒な手続きが一人一人の存在を包み込んでいるか
 らか、チップに埋め
 膨大な名付けにより、生を問うために荒れる繋ぎ目

22 遺跡と伝えられる丘に架かる橋の欄干にもたれる妊婦
 亡き妻の面影は留まったまま、風が通り過ぎる場所の
 白布
 透き通る骨格、鳥たちの鳴き声がまといつく皮膚
 いとしさの先に浮かびあがる雑踏の恐怖

23 暮れなずむむのは、何度も繰り返す女たちへのダッシュ
 と汗
 ハンドルを胸に突き刺した無垢な時代の昆虫の癖、く
 せーえ癖
 に、男たちを見えない鎖で列車に乗せた欲望のチケッ
 トは偽
 世界の背中で、くそつたれ野郎のせつせ、せつせと励
 んでいる店

24 北海の道、ライトもなく走りなさい途方もない杜甫
 南山に挑んだ沙弥が頼るのは歩みへ向けた恵方
 西域に沈んでいくのは長い影を背負った旅人の徒歩
 東の河へと続くのは水面を流れていくのが稲穂、とほほ

うた 神戸詞あしび

109-2017.02.26 大橋愛由等



沖永良部島の墓正月

「墓正月」の習俗が濃厚に残っている瀬利覚にある朝戸家の墓所である。同集落に住む前利潔氏の紹介によるものだった。本土の墓と違うのは、

墓所のスペースが広いこと、そして低い壁に囲まれて独立性が高いことだろう。墓石の形状そのものは本土と同じで、沖繩の亀甲墓は奄美には入ってきていない。墓所のスペースが広いのは、一族が寄り集まって飲食をするためであり、この日のために本土に働きに出ている家族が還ってくることもある。

22回目の〈奄美ふゆ旅〉である。近年の定番コースとなった神戸空港↓鹿児島空港↓沖永良部島↓徳之島↓奄美大島↓伊丹空港のコースを四日間であつた。旅程が限られているために、どうしても島嶼間は飛行機に頼らざるを得ない。そんななか、沖永良部島と徳之島の間のみは船によって移動する。たった二時間の船旅だが、わたしはこの移動を楽しみにしている。船旅は想像力を掻き立ててくれるし、船内で友人とであったり、誰かがわたしを認めていたりする。かつて一九六九年にはじめて南に向かった時は、神戸・中突堤から関西汽船に乗船して沖繩を目指した。当時、沖繩、奄美へは船による移動がもつぱらで、夏休みということもあり、客室に入り切らない若者たちは通路や甲板の上で時を過ごしていたものだった。

「墓正月」を シマの祭祀を想う

「墓正月」というのは、正月に先祖を家に迎えて、正月を共にすごし、そして一月一六日に家から墓に帰すための祭祀であると位置づけられている。瀬利覚を含めて、この「墓正月」の際に、特別の祝詞や唱え言葉はないという。きわめて私的な領域の家族祭祀なのである。わたしが訪れた朝戸家の墓所にも夕刻になると、親族が集まってきて、にぎやかな宴会が始まろうとしていた。ちょうどその時、鹿児島県文化財課の調査チームも「墓正月」の調査に入っていて、旧知の小川学夫氏（奄美歌謡研究者）と出会い、奄美の文化について意見を交わすことができたのである。

この「墓正月」に関してもうひとつの視点を紹介しよう。それは民俗・歴史研究者の先田光演氏（沖永良部島在住）の識見である。それによると「墓正月」はあくまでも個人祭祀であるので、集落や島全体に敷衍することはない。沖永良部島にはかつて豊潤に集落単位の共同祭祀があつたが、他の奄美群島の島とくらべて極端に減ってしまった（同じ北山文化圏である与論島には島建てとかかわるシニグ祭が継承されている）。そこで去年に行われた「世之主六百年祭」のように新たな島全体を包括した祭祀をあらたに創出してもいいのではないかと語るのである。世之主とは沖永良部島を統治していた北山王国系の支配者で沖繩本島を統一した中山勢力が軍船をひきいて沖永良部島にやってきた一四一六年（異説あり）に自害。その年からちょうど六百年にあたる去年、いくつかの記念行事が行われた。

詩と評論 月刊「Mélange」Vol.120 神戸	2017年02月26日 通巻120号★ 発行所/月刊「Mélange」編集部 〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F 編集・発行人/大橋愛由等（「Mélange」同人） maroad66454@gmail.com 定価600円(税別)
----------------------------------	---